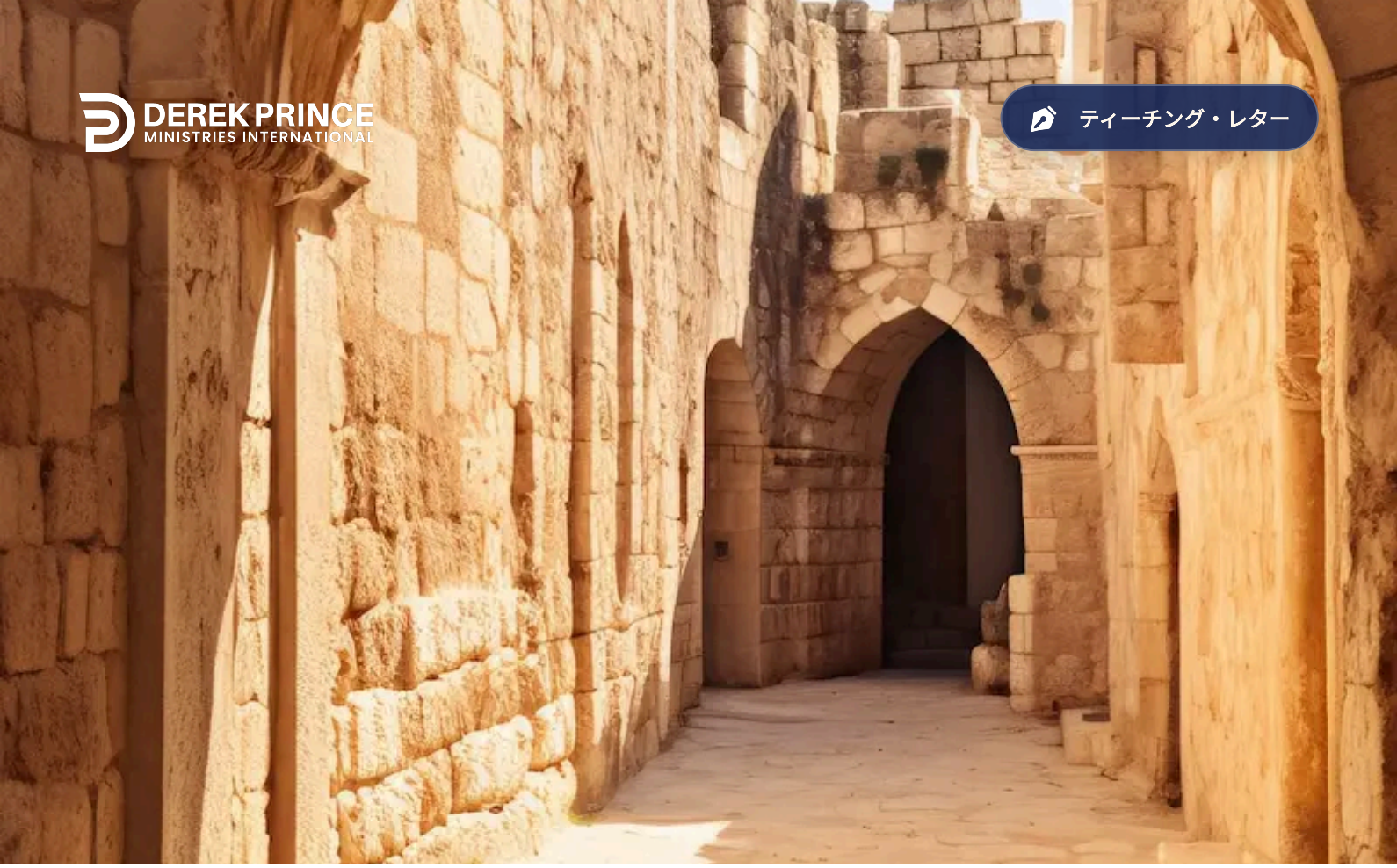

イスラエルの重要性



ティーチング・レター
著者 デレク・プリンス

今日、ニュースメディアで最も注目されているのは、他でもなく中東情勢です。この場所は、一夜の内にも第三次世界大戦を引き起しかねない、問題と紛争の中心です。中東がこれほどまでに注目されるようになった主な要因は、主権ユダヤ人国家であるイスラエルの出現です。

誕生以来絶え間ない対立と攻撃に遭い続けているこの小さなユダヤ人国家は、常に専門家たちを当惑させ、中東の政治的・軍事的バランスを根本的に変えました。

私はエジプト、リビア、スーダンおよびエルサレム（当時はパレスチナと呼ばれていた）で五年間の兵役を経験しました。これに続き、さらに二年間エルサレムに民間人として居住しました。その間、私は中東で当時起こっていた激動の出来事を目撃しました。

1948年、イギリスの委任統治が期間満了を迎える頃、私はエルサレムの郵便局から、いくつかの小包を預かっているという通知を受け取りました。ある朝、私がそれらの小包を受け取りに行くため、荷物持ちとして二人の子どもを連れて家を出ました。私たちが小包受取所がある道の角に着いた時、そこはアラブ人狙撃兵に襲われた後だと気づきました。その時すでにエルサレムは食糧不足になっており、私たちは食料も入ったその小包を放置することはできません。私たちはそこにいた人々と同様、全速力で走りました。ウサギが巣穴に逃げ込むように、ハアハアと息を切らしながらも、私たちは無傷で小包集配所にたどり着きました。

扉の向こうには、パレスチナ警察のイギリス人警官が警備にあたっていました。その警官は、自分が立っている入口の上の窓ガラスが狙撃兵の銃弾が突き抜けたため、おびえているようでした。しばらくの間、私たちはその小包受取所の前で息を整え、心を落ち着けました。すると、イギリス人警官が扉を開けるために手を伸ばし、状況を理解しようとしました。しばらくして、警官は私を自分のそばに来るようにと手招きし、狙撃兵の居場所を教えてくれました。私たちが入った入口の道路の反対側の端300メートルほど先に、コンクリート製の防御基地（トーチカ）がアラブ人たちによって建てられていました。その基地には私たちに面する側に細長い水平の隙間があり、その隙間の中にライフル銃口が見えました。

警官と私がその隙間を見ていると、隙間の中で銃口が左右に動き、兵が標的を探しているようでした。最終的には私たちは小包を受け取ることができ、私たちは来た道とは違う道で帰りました。小包受取所の角をさっと曲がり、荒廃した地を横切る狭く急な坂道に入ると、狙撃兵の砲火を逃れることができる道につながっていました。私たちが去る時、小包受取所のアラブ人責任者は、狙撃の恐れがあるため、その事務所を閉鎖することを発表すると言いました。イギリス人警官は入口でただ立ち続

© 2004 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

けていました。私が知る限り、郵便局のその小包部門が委任統治終了前に営業していたのは、数時間だけでした。

明らかに、中東の全体的な状況に関するどのような妥当な評価も、イスラエルが果たしてきた、そして果たし続けている独特な役割を最初に理解する必要があります。現在のイスラエルに関連するエルサレムの聖書的意義に関する重要な事実を以下に紹介します。そしてさらに具体的に、なぜイスラエルがエルサレムの分割政府に同意するように求められるべきではないのか、その理由を述べます。

歴史の中心

エルサレムはイスラエルの歴史の中でも独特の場所であり、世界の他の国には例を見ない場所です。そこは、神がダビデに命じて買い取らせ、宮を建設するように定められた場所です。

> そこで、主の使いは、ダビデにこう伝えるようガドに言った。「ダビデは上って行って、エブス人オルナンの打ち場に、主の祭壇を築かなければならない。」…そしてダビデは、その地所の代金として、金の重さで六百シェケルをオルナンに支払った。ダビデは、そこに主のために祭壇を築き、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げ、主を呼んだ。主は、全焼のささげ物の祭壇の上に天から火を下し、彼に答えられた。（Ⅰ歴代誌21：8、25-26）

のちにソロモンはこの場所に宮を建て終えたとき、神はソロモンにこう言いました。
「わたしの目と心は、いつもそこにある」（Ⅰ列王記9：3）。

神がご自身のために選んだと宣言した町がエルサレムでした。ソロモンは神が父ダビデに語られたことばを引用してこう言っています。*「ただ、エルサレムを選んでそこにわたしの名を置き…」*（Ⅱ歴代誌6：6）。

主は歴代誌第一23章25節で再びエルサレムの永遠性を繰り返しています。*「ダビデがこう言ったからである。『イスラエルの神、主は、御民に安息を与え、とこしえまでもエルサレムに住まわれる。』」*列王記第一11章36節で、神はヤロブアムに、王位を継承するソロモンの子レハブアムについて次のように言っています。

> *彼の子には一つの部族を与える。それは、わたしの名を置くために選んだ都エルサレムで、わたしのしもべダビデが、わたしの前にいつも一つのともしびを保つためである。*

ユダヤ人は聖書によって、年に三度エルサレムに巡礼するように命じられています。

> *あなたのうちの男子はみな、年に三度、種なしパンの祭り、七週の祭り、仮庵の祭りのときに、あなたの神、主が選ばれる場所で御前に出なければならない。主の前には何も持たずに出てはならない。*（申命記16：16）

エルサレムへの巡礼を命じている宗教は他にはありません。

エルサレムという名前は、ユダヤ人の聖書の中に778回出てきます。それとは対照的に、イスラム教の聖典コーランでは、エルサレムという語は一度も出てきません。

歴史的に、エルサレムはユダヤ人にとって、政治的においても霊的においても唯一の首都となってきた場所です。エルサレムは歴史を通して他のどの民族の首都にもなったことはありません。1967年6月の六日戦争の後でアラブ人にとって、町として政治的に重要になっただけでした。以前は、ヨルダン占領下では、エルサレムは一度も首都の地位を得ることはありませんでした。

バビロン捕囚からイスラエル人が帰還したあと、他国人たちがエルサレムを再建しようと試みました。ユダヤ人政治家であったネヘミヤは、イスラエルの人々にこう言いました。*「天の神ご自身が私たちを成功させてくださる。それで、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。あなたがたには、エルサレムのうちに何の取り分も、権利も、ゆかりもない」*（ネヘミヤ記2：20）。

長年にわたり、ユダヤ人たちは自分たちの相続地エルサレムに特別な名前を聖書から採用してきました。それは、*「シオン」*です。

> *主は大いなる方。大いにほめたたえられるべき方。主の聖なる山私たちの神の都で。高嶺の麗しさは全地の喜び。北の端なるシオンの山は大王の都。*（詩篇48：1-2）

これが、シオニズムという語の由来です。

シオンの回復

預言者イザヤは、イスラエル国家の復活を独特な現象として描写しています。

> 彼女は産みの苦しみが来る前に産み、陣痛が来る前に男の子を産み落とす。だれが、このようなことを聞き、だれが、これらのことを見た

© 2004 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

> か。地は一日の苦しみで産み出されるだろうか。国は一瞬にして生まれるだろうか。ところがシオンは、産みの苦しみと同時に子たちを産む。（イザヤ書66：7、8）

イスラエル国家の復活は、歴史的にも類のない独特の出来事として聖書の中に正確に示されています。1948年5月15日、イスラエルは、陸・海・空軍（飛行機は一機のみ）、国会、警察、医療、教育システムなど、すべての機能を備えた完全な国家として出現しました。歴史の中でそれと似たような再興をした国を私は知りません。神のそのような主権行為に敵対することにおける結末は、想像するのも恐ろしいほどです。

主に立ち返る

シオンの回復は、栄光の主が戻って来られることの前兆と考えられています。*「なぜなら主はシオンを建て直しその栄光のうちに現れ…」*（詩篇102：16）。

私たちの注意を一つの差し迫った重要な出来事である、「力と栄光に満ちた主イエスの再臨」に集中させるために聖書のすべての預言と現在の歴史のすべての展開が結合します。これがオリーブ山で起こると預言されていることに、特別な意義があります。

> *その日、主の足はエルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山はその真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ、残りの半分は南へ移る。*（ゼカリヤ書14：4）

それに続いて、イスラエルの地と民をどのように扱ったかに基づいて、神がすべての国をさばかれる時が来ます。

> *見よ。わたしがユダとエルサレムを回復させるその日、その時、わたしはすべての国々を集め、彼らをヨシャファテの谷に連れ下り、わたしの民、わたしのゆずりイスラエルのために、そこで彼らをさばく。彼らはわたしの民を国々の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分配したのだ。*（ヨエル書3：1-2）

神の目的は、エルサレムをすべての国々を祝福する源とすることであり、神はその目的に反対するすべての国々を厳しくさばくと約束しておられます。聖書は、主が再臨される時、ユダヤ人が主権を持つエルサレムとなることをはっきりと言っています。イエスは言われました。

> 「エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。*今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」*（マタイ23：37-39）

マタイによる福音書24章で、イエスは預言者ダニエルによって語られた*「荒らす忌まわしいもの」*（15節）について言及しています。そして、*「ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい…あなたがたの逃げるのが冬や安息日にならないように祈りなさい」*と言っています（16、20節）。安息日に逃げることに対する警告は、エルサレムがユダヤ人の規則の下にあることを意味しており、公共交通機関やガソリンスタンド、銀行などの商業の営業は禁じられています。ユダヤ人政府の下でのみ、それが問題となるのです。

私の結論を簡単にまとめましょう。神はご自分の永遠のご計画の中で、国々をどのように取り扱うかについて、エルサレムを決定的な判断材料とされました。神のエルサレムに対する目的と一致する国々は、神の祝福を受けるでしょう。しかし、神の目的に反する方針に従う国々は厳しく対処されます。神の知恵と見分ける力、そして理解力が、中東の問題に影響力のある立場を持つすべての人に与えられるよう、祈る献身をしてください。

© 2004 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク

ティーチング・レター

原稿: TL-L044-100-JPN
最終更新日: 16 Sept 2026
ウェブサイト: Derekprince.com/ja/resources



© 2004 - デレク・プリンス・ミニストリーズ・インターナショナル・インク